「日々の理科」（第 1465 号） 2018（H30),-7,10

「臍帯を観察する（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

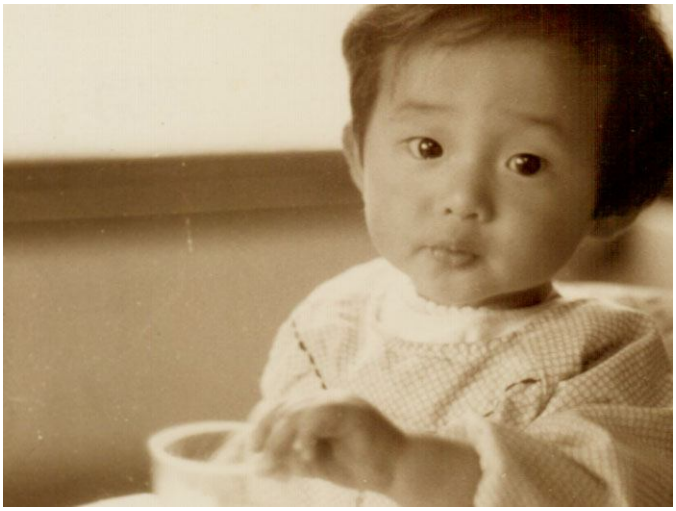
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

「ヒトの誕生」の単元は、実に指導しにくい。たぶん５年生理科を指導する、小学校教員のほぼ 100%がそう思っているだろう。観察・実験の結果から学ぶことを主眼としている理科という教科にあって、それがほとんどできないからだ。

私はそれを少しでも補おうと、家にある出生時の資料（写真や記録）を、家の人の許可を得て、持参可能な人は持ってくるように指示してみた。いろいろな家庭があるので、この実践は慎重にする必要がある。

最初に私の出生直後の写真を見せた。「えー！ちっちゃい！」「生まれた時からおでこが広いね！」「髪の毛が今より多い！」実に勝手なことを言っている。



これはたぶん１歳になる前。父が写真家で、こういう写真が 1000 枚ぐらいある。有難いことだ。

写真もたくさん持ってきてくれたが、中には「臍帯（さいたい）」を持ってきてくれた子どももいた。臍帯とはいわゆる「へそのお」のことである。

臍帯は大抵、こんな桐の箱に入っている。桐の箱は通気性が良く、虫も付きにくい。この箱には金文字で病院名が刻印され、お守りのように霊験新たかである。

これがごく一般的な臍帯の保存状態だ。大切なものなので、触らないように注意して、子どもたちに見せた。「えーー、これがへそのお？」「何か予想外！」「あんまりきれいじゃない」「何かの干物みたい」「これのどこに血液が流れていたの？」大騒ぎになった。